




こんな風に使っています。

DAM シミュレーター

を使って看護師のレベルをアップ!

事例紹介:  京都大学医学部附属病院
総合臨床教育・研修センター
WEB ▶▶ <https://www.kuhp.kyoto-u.ac.jp/>

受講者の対象

主に院内の看護師
/ その他: 医師、研修医など

講師 受講者数

メイン講師 1名 10人から20人
サブ講師 5名

手順1 必要物品の準備

- DAMシミュレーター トレーニングモデル
- 口喉鏡
- スタイレット
- シリンジ
- マギル鉗子
- 聴診器
- 挿管チューブ
- 潤滑剤
- バックバルブマスク
- バイトブロック
- 固定用テープ
- 円座または枕やタオル

受講者2-3人につき1セット用意しましょう

目的

院内すべての看護師が気管挿管を理解し、適切な介助ができるようになる。
(気管挿管に使う器具や、投与する可能性のある薬剤も含む)

講習会を始めたきっかけは?

病院では、気管挿管の知識について看護師によって差があるため、夜間などのスタッフが少ないときに適切な処置を施せない場合が見られました。看護師間の知識のギャップを無くし、いつでも的確に介助できるようにするために、このトレーニングを始めました。

レイアウト例



知っている? トレーニングのコツ

POINT まずは教えずにトライさせる

コルプの経験学習のサイクルを意識しながら関わります。まずは2-3人のグループになってもらい、過去の記憶を頼りにしながら挿管介助の準備を実施してもらいます。準備をしながら、迷ったところ、困ったところのすべてが学習者のニーズへと変わっていきます。これが能動的学習、アクティブラーニングへと誘うコツです。与えられると、自然と受け身になってしまうのが学習者の特徴です。主体的に学んでもらうためには、学習者にニーズを持たせ、「知りたい」という欲求を掻き立てましょう! 学習者が戸惑っているときも、学びのチャンスです。具体的な質問(発問)を投げかけて、少しずつ正解へと導いていきましょう。

POINT 講師を集める方法

メインの講師は、気管挿管のエキスパートである救急部の医師や研修センターの医師です。また、京都大学や京都府立医科大学、および近隣の医療系の学部生を中心としたKUMASALという救急蘇生サークルのメンバーや京都橘大学の救急救命学科の学生さんたちが、インストラクターとして協力します。彼らは、質の高いトレーニングを日々受けており、また全国行脚しICLSを教えている面々です。インストラクションについても学びの多いコースとなっています。

「教えてくれるまで待つ」を、「自分から学ぶ」に変える指導を!

手順2 トレーニングの実施

下記の例は約1時間のトレーニングを想定しています。

<p>気管挿管に関する知識の確認</p>	<p>20分</p>	<p>まずは、自分たちで挿管の準備をしてもらいます。その後で1台のシミュレーターの周りに集まってもらい、学習者に質問を投げかけながら気管挿管の場面を再現していきます。</p> <p>POINT 薬剤とその使い方を理解する ここでは、学習者が薬剤についてだけでなく、使用する患者の状況もセットで理解していることを確認します。</p> <p>1. 患者が苦しんでいて、じっとすることができない。(講師は「苦しい、苦しい」と叫び、患者を演じます) Q: あなたなら、どうしますか? A: 鎮静剤を投与します。 → 鎮静剤の種類と量を明らかにします。</p> <p>2. 患者の顎が強張り、開口が難しい場合はどうすべきか?(講師は、DAMシミュレーターの顎と口が全く動かせないような演技をします) Q: あなたなら、どうしますか? A: 筋弛緩剤を投与します。 → 筋弛緩剤の種類と量を明らかにします。</p>
<p>器具の準備</p>	<p>10分</p>	<p>あらかじめ、色々な器具(気管挿管に関係ないものも含む)を準備して、そこから学習者に必要な器具を選んでもらいます。</p> <p>器具の役割と使う意味を考えさせながら、一つずつ器具の説明をしていきます。</p> <p>POINT 実際に、器具を手にとってもらいましょう。</p>
<p>気管挿管トレーニング</p>	<p>25分</p>	<p>1. スニффイング・ポジション -必要であれば、頭の下に枕を敷きます。</p> <p>2. チューブの挿入 -気管へチューブを挿入できたか、聴診器で確認をします。 -片肺挿管や食道挿管の失敗例も提示します。</p> <p>3. チューブの固定 -テープを使ってチューブを口角に固定します。</p> <p>POINT 2-3人でローテーションしながらトレーニング 気管挿管のトレーニングでは、術者と介助者の役割をローテーションして互いの目線から手技を学びます。モデルを使って実際に手技をすることで、適切な介助の仕方・タイミングを理解することができるので、それぞれ何度か経験することが大切です。</p>
<p>まとめ</p>	<p>5分</p>	<p>学習者からの質問を受け付け、疑問を解決しましょう。</p>

